10

夜の生活活動を支え地域活性化に資する都市と交通のあり方に関する研究

宇都宮大学教授
大森 宣暁

本研究は、人口減少・少子高齢社会において、全ての人々が安全・安心・快適に、夜間の自宅内外の生活活動に参加できる環境整備に向けて、我が国の社会的文化的特性を反映した都市と交通のあり方について、幅広い視点から検討を行うことを目的とする。本稿では、東京都市圏および宇都宮市居住者に対して、飲酒活動の実態と意識および健康／幸福感に関するアンケート調査を実施した結果を報告する。分析の結果、男性、若者、東京都心居住者の方が飲食店での外飲みの頻度が高いこと、外飲み、家飲みの理由や外飲みの満足度向上のための要因の地域による違いがわかった。また、新型コロナウイルス蔓延により、外飲みの頻度の減少と主観的幸福感の低下が起こり、その程度は、女性、若者、東京都市圏で大きかった。

自主研究「夜の生活活動を支え地域活性化に資する都市と交通のあり方に関する研究」(日交研シリーズ A-799)

1．はじめに

外出活動は人々の生活の質向上において重要な要因であり、飲酒を伴う外出活動の量や質も、日常生活における満足度や幸福感に影響を与えている[1]-[3]。一方、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人々の外出自粛と飲食店の営業自粛が行われ、飲酒を伴う外出頻度の減少とともに在宅でのオンライン飲み会も普及してきた。本研究は、適度に自宅内外で飲酒活動を行えることが人々の健康と幸福につながり、そのための都市・交通環境の整備が重要であるとの視点から、個人属性と地域に着目して飲酒活動の実態と意識および健康／幸福感との関係を分析することを目的とする。また、新型コロナウイルス蔓延による飲酒頻度や主観的幸福感の変化についても分析する。

2．調査概要

2020 年 4 月上旬（緊急事態宣言発令前)、東京都市圏および宇都宮市居住者、計 840 人に対して、Web アンケート調査を実施した（表１)。飲酒活動の実態と意識および健康／幸福感に関して、新型コロナウイルス蔓延前（2019 年 4 月～12 月）の状況を質問し、最後に新型コロナウイルス蔓延による飲酒頻度の変化や主観的幸福感を質問した。また、調査票において、飲酒活動は、飲酒の状況の違いを考慮して、以下の４つに分類した。なお、お酒を飲まない人については、一緒にいる人がお酒を飲む場合について回答を求めた。

① 仕事の関係や所属するグループ等の付き合いで居酒屋、バーなどに飲みに行く（仕事関係の外飲み）
② プライベートで居酒屋、バーなどに飲みに行く（プライベートの外飲み）
③ 自宅でお酒を飲む（家飲み）
④ 友人や知人宅でお酒を飲む（友人宅飲み）

3．分析結果

1）飲酒活動の頻度

4 種類の飲酒活動全てについて、男性の方が女性よりも頻度が高い。年齢別では高齢になる程、外飲みと友人宅飲みの頻度が低いが、家飲みの頻度は高い。地域別では、東京 23 区、東京都市圏政令市、東京都市圏それ以外、宇都宮の順に、外飲みの頻度が高い（図１)。

2）飲酒活動の意識

外飲みの理由は、「友人や知人とのコミュニケーション」と回答した割合が最も高く、次いで、「自宅ではできない飲食」、「非日常の雰囲気を味わう」、「ストレス解消」、「リラックス」である（図２)。一方、家飲みの理由は、「リラックス」、「自宅の方が気楽」、「外飲みより安い」と回答した割合が高い（図３)。

「外飲みの満足度向上のために必要なこと」については、飲食費や交通費といった金銭制約の緩和に関わる項目の回答率が最も高い。また、宇都宮、東京都市圏それ以外で、自宅や職場、飲食店まで「徒歩や公共交通で行きやすい／帰りやすい」の割合が相対的に高い（図４)。

表１ 飲酒活動と健康／幸福感に関するアンケート調査概要

調査期間	2020 年 4 月 3 日（金）～4 月 6 日（月）
調査対象者	楽天リサーチ株式会社のモニター： ・東京 23 区 240 人、東京都市圏政令市 240 人、東京都市圏それ以外 240 人、宇都宮市 120 人 ・性別（男女)、年齢（20 代、30 代、40 代、50 代、60 代、70 代以上）で同数ずつ収集
調査方法	インターネット調査
調査項目	○2019 年 4 月～12 月の状況に関して： ・個人属性：性別、年齢、居住地、職業、年収、婚姻・交際関係、世帯構成など ・健康、幸福感：身長、体重、生活習慣、主観的健康観、生活満足度、主観的幸福感など ・飲酒活動の実態と意識：頻度、誰と、金額、好み、帰宅交通手段、満足度、飲酒の理由など ○2020 年 4 月の状況に関して： ・新型コロナウイルスによる飲酒頻度の変化、主観的幸福感など

３）新型コロナウイルス蔓延による飲酒頻度と幸福感の変化

年齢が低いほど、外飲みの頻度が減った人の割合が高く、逆に家飲みの頻度が増えた人の割合が高い。また、東京 23 区の方が、宇都宮よりも外飲みの頻度が減った人の割合が高く、家飲みの頻度が増えた人の割合が高い（図５）。主観的幸福感（「あなた自身はどの程度幸せですか？　0 点（非常に不幸せ）～10 点（非常に幸せ）でお答え下さい。」に対する回答値）は、新型コロナウイルス蔓延前後で低下し、男性より女性、高齢者より若者、宇都宮より東京都市圏で低下の程度は大きかった（図６）。

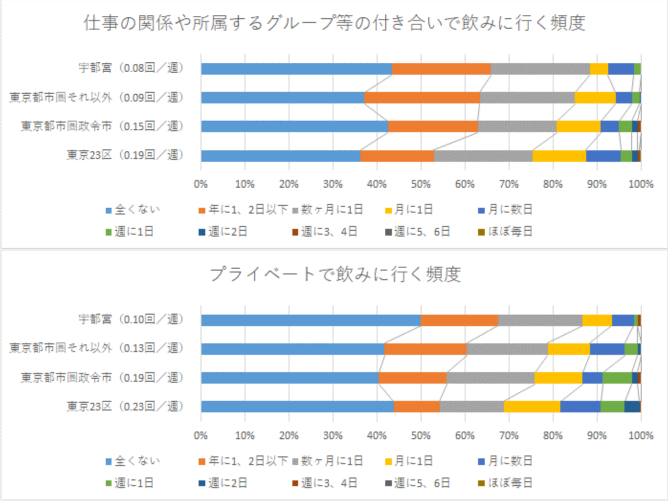

図１　外飲みの頻度

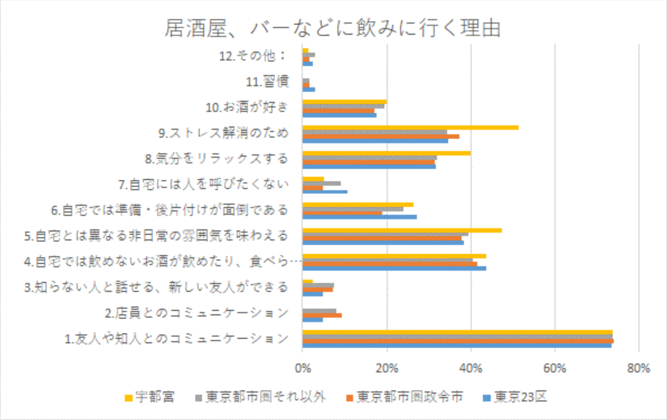

図２　外飲みの理由

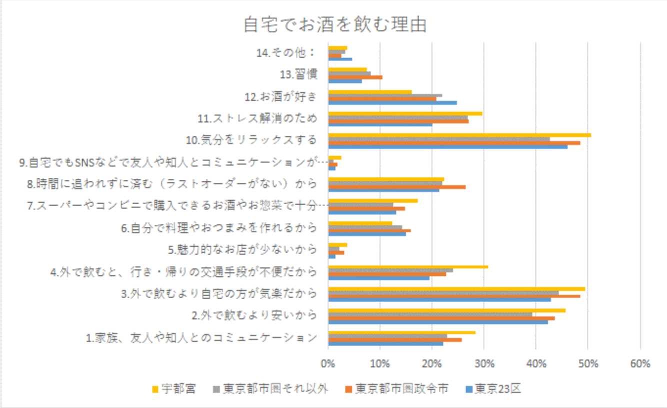

図３　家飲みの理由

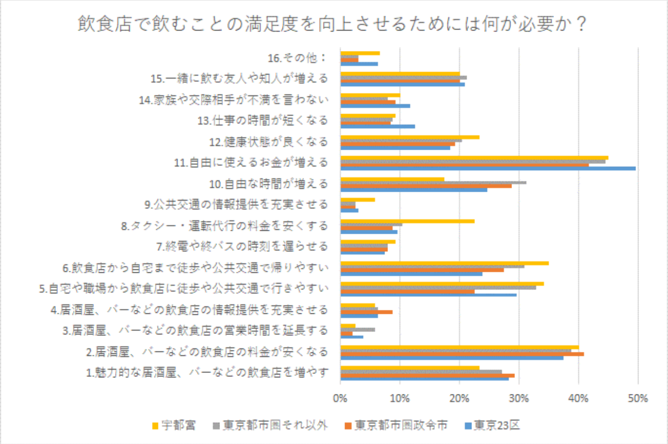

図４　外飲みの満足度向上に必要なこと

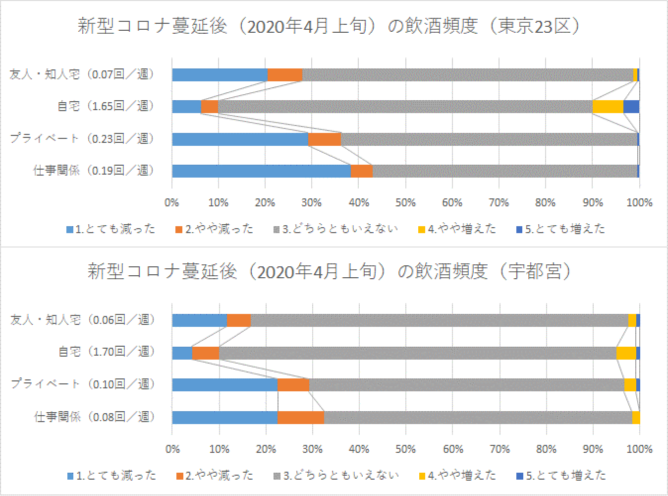

図５　新型コロナウイルス蔓延による飲酒頻度の変化

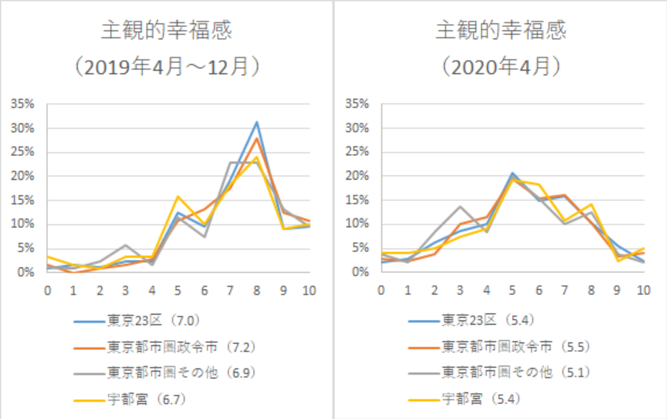

図６　新型コロナウイルス蔓延による主観的幸福感の変化

参考文献

[1] 森本瑛士，大森宣暁，菅野健，長田哲平 (2017)「若者の余暇活動の実態と意識－地方都市への地域定着を視野に入れて－」『土木学会論文集 D3』Vol.73, No.5, pp.I_537-I_547.

[2] 近藤雄太，大森宣暁，長田哲平（2017）「出張者の自由時間における活動・消費行動の特性―北関東 3 都市への出張をケーススタディとして―」『都市計画論文集』 Vol.52, No.3, pp.856-862.

[3] 菅野健，大森宣暁，長田哲平（2018）「大学生の余暇活動と主観的幸福感」『土木学会論文集 D3』Vol.74, No.5, pp.I_809-I_816.